# Ⅷ. 業績評価

第五期中期目標におけるモニタリング指標の一つとして、創出された研究成果および実施した学術ネットワーク活動について、アジア経済研究所業績評価委員会による評価を実施し、その評価結果は法人の自己評価にも活用された。

創出された研究成果についての評価においては、2022 年度に刊行または発表した研究成果のうちの 11 件を対象として専門委員 22 名に委嘱し、評価を実施した。評価結果は、5 段階評価の総合平均で 4.7 であった。

アジア経済研究所が 2022 年度に刊行または発表した研究成果のうち、特に評価できるものとして、「米中経済対立－国際分業体制の再編と東アジアの対応」が多くの委員から挙げられた。その理由として、「米中対立の激化によるデカップリングの問題は、現代のビッグ・イッシューの一つであり、その問題に取り組んで、いち早く成果の出版にまでこぎつけたことは称賛に値する。特にバリューチェーンへのインパクトに焦点をあて、それを具体的に台湾とベトナムについて分析して見せたことは、今後の研究を刺激する上で重要な貢献である」、「米中対立を背景としたデカップリングは、非常に高い関心を呼んでいる問題であり、バリューチェーンの再編と言った喫緊の課題に密接する。本研究は、こうした課題を多角的に検討した研究成果として、社会ニーズに応える意義が高い」、「米中の経済対立が東アジアにおいてもたらす政治・経済的インパクトを、アメリカ、中国、中国以外のアジア諸国という複数の観点から包括的に理解しようとする共同研究で、最近の変化を掴む上で特にビジネス界に有益な情報源となっている」等のコメントを得た。

そのほか、「温暖化ガス排出を、グローバル・バリューチェーンの観点から追跡した研究で、Cell 姉妹誌の『One Earth』という世界最高レベルの学術誌から出版されたことでアジア経済研究所の世界的知名度を高めた」、「グローバル・バリューチェーンの研究と温暖化ガス排出を結びつけた画期的な研究。環境科学分野で有力な国際学術雑誌に掲載されたことは、国際的な評価も高いことを示している。多くの国の研究者を糾合した成果でもあり、そのイニシアティブをとった孟研究員に敬意を表したい」との理由から「Developing countries' responsibilities for CO2 emissions in value chains are larger and growing faster than those of developed countries」が複数の委員から高い評価を得た。

また、「これまで十分に取り扱われなかった領域の問題でもあるが、多様性を重視するトレンドにも配慮し、今後の研究の基礎にもなり得る研究として、アジ研ならではの成果と評価できる」、「従来にない新しい視点での研究として評価されるべき」との理由から「中東の中の『障害と開発』」が、そして「アジア経済全体を俯瞰するのに大変有用な年報であり、ユーザーとして評者は高く評価したい。特に、新型コロナウイルスの感染拡大のアジア各国への影響を知るうえで重要である」、「ほぼ網羅的な報告の持続性の高さは評価されるべき」との理由から「アジア動向年報 2022」も、それぞれ複数の委員から高い評価を得た。

84 件の研究課題のうち特に実施する意義を高く評価できるものとして、①「社会科学者のための大量データ処理の方法と実践」、②「『ビジネスと人権：責任ある企業行動およびサスティナビリティに関する政策』に係るプラットフォーム事業」、③「アジア諸国の動向分析」、④「デジタル化と発展途上国ーデジタル化によって変わるもの、変わらないもの」、⑤「GVC への参入・高度化と構造比較」、⑥「グローバル・バリューチェーンの見える化システム構築」が複数の委員から選ばれた。委員からはそれぞれ、「EBPM の重要性が高まる中、ビッグデータの処理やその構築の関するプロジェクトはニーズが高い（①）」、「日本政府の政策指針（「ビジネスと人権に関する行動計画（2020-2025）」、「責任あるサプライチェーン等における 人権尊重のためのガイドライン」）の策定に貢献するなど、研究としてだけでなく、実務におけるニーズにも効果的に対応する、価値の高い研究である（②）」、「1970 年から続くアジア経済研究所の経常プロジェクトで、世界的にみても貴重な研究情報源である（③）」、「国・地域による変化の違いに焦点をあて、デジタル化と途上国の関係を地域の文脈から観察し、比較検証する研究であり、時宜を得た研究テーマである（④）」、「研究の意義とともに新規性が高い。また、英文外部出版単行書として出版されることも研究の国際的な貢献度を高める（⑤）」、「最近注目されている GVC に関して、様々なデータを連結しようという野心的なプロジェクトである。成功すれば、大きな貢献となるだろう（⑥）」などのコメントを得た。

研究活動全般に対する評価としては、「パンデミック、対ロシア経済制裁、米中対立によるグローバル生産網の分断（デカップリング）は、現代の世界経済にとって焦眉の問題。この問題にいち早く対応し、複数の英文ディスカッション・ペーパーを出し、また IDE-GSM を使った分析に戻づくポリシーブリーフを作成し、NHK の番組制作にも協力したこと、さらに丁可編の『米中経済対立―国際分業体制の再編と東アジアの対応』をオープン・アクセス本として出したことは、アジア経済研究所における GSM やバリューチェーンの研究蓄積を生かし、かつ世界のビッグ・イッシューにいち早く対応した動きとして、高く評価したい」、「幅広いテーマを取り上げており、アプローチも多様（経済学、政治学、国際関係論等）で層の厚さを感じさせる。特に目をひいたのは、米中対立やロシアのウクライナ侵攻を取り上げたもので、機動力の高さに脱帽した」、「国際的なトップジャーナルへの論文掲載が実現し、アジア経済研究所が国際的に高いレベルの研究機関であることを世界の研究コミュニティに対して発信した」、「質的にも量的にも極めて優れたものとなっている。研究テーマについても経済問題のほか、『ビジネスと人権』やジェンダー問題や障がい者問題など、より幅広い研究分野で多様性の高いテーマについて研究が進められた」など、アジア経済研究所が世界経済の焦眉の問題に機動的に対応しつつ、幅広い研究テーマを多様な手法の下に実施し、質的にも優れた成果をあげていると高く評価するコメントを得た。

また、「重要な学術研究の成果は、邦文、並びに欧文ジャーナルや和文書籍として刊行されているほか、新たな研究課題の発信媒体としての Discussion Papers、政策提言に向けたポリシー・ブリーフ、さらには直近のグローバル・サウスの課題解説を行う IDE スクエアな

ど、様々な媒体を用いて発信していることは、その内容とともに社会の様々なニーズへのきめ細やかな対応という意味で重要な取り組み」、「ウェブサイトによる発信が強化されていることも、国内外の研究者・市民にとって有益。特に、『世界を見る眼』シリーズは、世界で起こっている大問題（ロシアのウクライナ侵攻や米中対立）が途上国に与える影響や、途上国各国で起こっている時事問題などに関する分析を素早く提供しており、新聞報道などでは得られない、問題を深く掘り下げた知見を得ることができる」など、成果の発信を評価するコメントも得られた。

今後への期待として、世界動向におけるグローバルサウスの立ち位置がどうなるかという大きな問題について、多数のグローバルサウス研究者を擁するアジ研により大きなエネルギーを充てることを期待するコメントや、地球温暖化やロシアのウクライナ侵攻などの最近のホットイシューを扱う本格的な研究を期待するコメントもあった。

2022 年度に実施した学術ネットワーク活動のうち、特に意義を評価できるものとして、「世界銀行との共催による国際シンポジウムの開催～アジアにおける海洋プラスチック汚染と対策：生態系への影響と国際協力の枠組み～」が多くの委員から挙げられた。その理由として、「代表的な国際開発金融機関である世界銀行と共催によって海洋プラスチック問題に関した国際シンポジウムを開催することは、アジア経済研究所のプレゼンスを内外に示すことに大きく貢献する」、「『アジアにおける海洋プラスチック汚染と対策』は、緊急な対応を要する重要課題であり、それを国際的に注目される国際シンポジウムの形で発信したことは社会的意義が大きい」、「世界銀行および朝日新聞社という、海外・国内で発信力の高い機関との共同企画である点、また、600 名もの参加者を獲得したインパクトのあるイベントであったことが高く評価できる」等のコメントを得た。

このほか、国際機関 ERIA にかかわる東アジア・ASEAN16 カ国の研究機関ネットワーク（RIN）に日本を代表してアジア経済研究所が参加している「RIN（研究機関ネットワーク）会合の開催」や、アジ研が主唱し“Reconnect East Asia towards building a dynamic, sustainable, inclusive, resilient, and peaceful East Asia”というテーマで議論した「RIN オンラインワークショップの開催」がさらなる関係強化に資する活動としてそれぞれ複数の委員から高く評価された。

また、重要な新興国であるインドネシアの国家研究イノベーション庁（BRIN）と将来の研究協力についてワークショップを開催したことを先見の明のある動きとして評価するコメントや、オランダ国際アジア研究所（IIAS）との連携を「恒常的な関係に移行することによって、より厚みのある学術ネットワークの形成に寄与している」と評価するコメント、さらには、タイ・メーファールアン大学との共催イベント「メコン・ダイアログ」について、「極めて時宜にかなう形でメコン川流域の環境、食糧、エネルギー、気候変動にかかわる会合が開催されたことは、今後の研究協力において重要な交流」と評価するコメントなどが得られた。

学術ネットワーク活動全般に対する評価としては、「活動量および活動の多様性について

十分な水準に達している」と評価するコメントがあった。また、国際的な移動制限が緩和されるなかで学術ネットワーク活動が活性化し、ハイブリッド型や対面で多くの学術交流イベントが継続的に開催されていることを評価するコメントが複数の委員から得られた。具体的には、RIN 会合や世界銀行との共催による国際シンポジウムなど、国際機関と共同で国際会議等を開催したことを評価するコメントや、それらの共催イベントにより登壇者・参加者の拡大および多様化が図られていることを評価するコメントもあった。

海外 15 カ国から 21 名の客員研究員を受入れたことについても活発な国際研究交流として高く評価するコメントがあった。また、アジア・アフリカ諸国の若手行政官等の人材育成とネットワーク構築を行うイデアス研修事業に関しては、「行政官を含む国内外の次世代研究者の養成が可能となる仕組みが複数維持されていることは心強い。こうした人材育成を果たす学術ネットワーク活動であることは高く評価されるべき」、「国内の大学から MOU に基づくイデアス研修事業への大学院生受入れを行い、日本人研究者の養成に貢献していることは高く評価されるべき」など、複数の委員から高く評価するコメントがあった。

このほか、コロナ禍で滞っていた研究者の海外派遣について、「今後のアジ研の研究の活性化につながる礎となることが期待される」など、複数の委員から評価するコメントがあった。また、アジ研の研究者が多くの国際会議・学会で論文発表を行った実績を評価するコメントも寄せられた。

また、図書館の活動に着目した評価としては、「アジ研のリポジトリのメタデータを Google Scholar、国立情報学研究所、国会図書館に提供したことは、アジ研の成果の発信を促進する上で役立つ」とのコメントも得られた。